

VI 第10回 鯨に関する座談会

共催 { 鯨類研究所
水産海洋研究会

主 題 昭和43年度北洋捕鯨の操業結果について
日 時 昭和43年12月13日(金)13時-17時
会 場 大洋漁業協会議室

コンピナー 奈須敬二(遠洋水産研究所)

話題および話題提供者

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1. 操業概要とその結果 | 甲 藤 幸 一(大洋漁業株式会社) |
| " " | 安 井 敬 一(極洋捕鯨株式会社) |
| " " | 加 藤 英 明(日本水産株式会社) |
| 2. 鯨体生物調査結果について | 正 木 康 昭(遠洋水産研究所) |
| 3. 最近における捕鯨漁場とその海洋構造 | 町 田 三 郎(鯨類研究所) |

1 操業概要とその結果(1)

甲 藤 幸 一(大洋漁業株式会社)

今次北鯨は母船第3日新丸、捕鯨船8隻(内1隻は探鯨専門)で抹香鯨2000頭の捕獲枠での出漁であつた。今年は過去の漁場の変遷から漁場の基礎調査の必要性を感じ先航調査船を3隻出し、極洋捕鯨と共同探査した。24日東経沖合漁場(45N. 170E)より操業開始したが、この海域発見多数あるも(2日間で発見約500頭)ほとんどが35ft(10.6~10.8m)位の物で選鯨に非常に苦労した。5月27日から第1回目の列島沿い操業に入つたが、操業開始前の探鯨ではアムチトカ水道より西経側(東側)では列島の南北共に文字通り発見皆無という報告を受けていた事でもあり、アムチトカ水道以西の列島沿い北側を操業する事となつた。この時期での列島沿いの海況は3~4度台の収れん域で捕獲があつた。船団はそのまま西進してコマンドル諸島南東(54N. 168.30E)迄進出したが、ここは過去の実績より小抹香の捕鯨となるので1日間操業で反転東進、アツツ島の南で小抹香を20頭程たいた後にアガツツ島の南~タホマリーフ~キスカ島の南迄進出するも鯨の姿はまったく見えず、捕鯨船1隻を列島の北側に廻したが、これも同様発見なし。水温は先の西進の時(5月28日~30日)より全体に1度程度上つており、4~5度の対応を見せていた。この間探鯨船がアツツ島より東進、ウマナツク島西側迄探するも発見無し。その